

メッセージアウトライン

創世記 2:15 ~25 「善悪の知識の木、男と女」

[15-17]「神である主は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。神である主は人に命じて仰せられた。『あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。』」

神は人をエデンの園に置かれたが、そこで遊んで暮らしてよいとは言われなかった。神は人を管理者として、そこを耕させ、また守らせたのである。神が用意された理想的な世界は怠惰と無為の世界ではなく、まじめな活動と奉仕の世界であった。神はここで一つの制約を人に与えられた。それは、園のどの木からでも思いのまま食べてもよいが、善悪の知識の木からは取って食べてはならないというものであった。そして、もし食べると「あなたは必ず死ぬ」という恐ろしい結果を伴うものであった。この「死」は神との断絶による霊的な死、また肉体の死を意味する。神は人を絶対に言われたことを守るロボットのように造られず、自由意思を与えられ、それに基づいて正しい選択をし、神を愛し神に従うことを望まれたのである。神によっていのちを与えられ、神のかたちに創造され、神との交わりを持ち、理想的なエデンの園という地に置かれた者として、神のことばを守ることは当然で正しいことであった。神の造られたものはすべて非常に良いものであり(1:31)、必然的に人が見、経験したことはすべて善であった。彼はまだ悪を知らなかったが、神の戒めを破り、神に不従順な者となる時、必然的に善と悪の違いを知り、善悪を識別する知識を持つ者となる。善悪の知識の木が具体的にどのようなものであったかはわからないが、この木はそのための唯一の戒めであったのである。

[18-20]「神である主は仰せられた。『人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。』神である主は土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造り、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が生きものにつける名はみな、それがその名となった。人はすべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけた。しかし人には、ふさわしい助け手が見つからなかった」

これらの動物たちすべてがエデンの園に住んでいたとは考えられない。それゆえ神はご自身でこれらの動物たちを人のところへ連れて来られ、それにどんな名をつけるかを見られた。人は神のかたちに似せて造られたものであり、地を従え、すべての生き物を支配すること、すなわちこの世界を神のみこころに従って管理することをゆだねられた存在であるので、それにふさわしい知性や識別力が与えられており、動物たちに適切な名をつけたことであろう。しかし、これらの動物たちは人にはふさわしい助け手ではなかった。

[21-22]「神である主は深い眠りをその人に下されたので、彼は眠った。そして、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。神である主は、人から取ったあばら骨をひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた」

これは人類最初の麻酔手術とでも言うべきものである。神は動物たちと同様に女を造られたのではなく、人のあばら骨の一つを取って女を造られたのである。男の助けにふさわしく、頭からではなく、足からでもなく、わき腹から取って女を造られた。これは男の助け手であるが、対等で仲間であり、二人で一体となって心を合わせて神に仕えるべきことを示している。

今日多くの人々はこのことを非科学的な神話のようにみなしており、神が男のあばら骨の一つ取ったのならば、現在の男のあばら骨は女より一本少ないはずなのに同じではないかなどと言う。しかし「獲得形質は遺伝しない」ということは今日では科学的な真理であり、親のあばら骨が手術によって一本少なくなっているとしても、それが子や孫などの子孫にも同様に伝わるということはない。

[23-25]「人は言った。『これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉、これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。』それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」

「私の骨からの骨、私の肉からの肉」とは自分と同じ一つの骨肉に由来する親近感を表したものであろう。

男から取られたので女と名づけるとは日本語では意味が分からないが、原語のヘブル語では男は「イシュ」、女は「イシャ」で「イシュ」から取られたので「イシャ」と名づけたのである。

「それゆえ男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となる」これは不朽の価値をもつ言葉である。神はここに一夫一妻制を定められた。一夫多妻ではなく、一妻多夫でもない。

これは地上におけるすべての人間関係のうち、最も基本的で重要な神のみこころである。

さらにこの夫婦一体の関係はキリストと教会との関係を示すものとして用いられている。

→エペソ 5:24~25

こうして、最初の結婚は完成し、最初の家庭ができ上がった。人とその妻は肉体的、精神的にお互いの特質を補い合って、まさに一体であった。この理想的家庭に罪が入る前、聖書は「ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった」と言っている。彼らはお互いに不自然には思わず、恥とか困惑する思いはなかった。さらにもっと大切なことは、彼らは罪や道徳的罪責の自覚を持たず、罪のない者であった。このまま彼らが子を生み、地に増え広がり、世界を神のみこころに従って支配し、管理していくなればすばらしい世界が実現したであろう。しかし、この後、神のことばに対する不従順、反逆の罪を彼らは犯し、世界は呪われたものとなり、長い罪の歴史が続くこととなる。しかし、神はそこにも救いの道を備えてくださるのである。→ヨハネ 3:16